

第20回（昭和63年度）サントリー音楽賞  
受賞者は 林 康子氏に決定

毎年わが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた日本人に贈る「サントリー音楽賞」の第20回（昭和63年度）受賞者は、林 康子氏に決定した。

1. 平成元年1月15日（成人の日）午前10時より東京丸の内の東京会館において、選考委員10名（芥川委員は欠席、吉田、諸井両委員は書面参加）の出席により第1次選考を行い、「候補者」を選定した。

引き続き3月14日（火）午前10時より、東京紀尾井町のザ・フォーラムにおいて選考委員12名の出席により最終選考会を開催、慎重な審議の結果、林 康子氏が選定された。

そして、同日午後開催の理事会において正式に決定された。

2. 林 康子氏の選考理由は別紙の通り。

3. 選考委員は下記の通り。

芥川也寸志・岩井宏之・小石忠男・菅野浩和・武田明倫・中河原理・丹羽正明  
船山隆・松本勝男・宮澤縦一・諸井誠・門馬直美・吉田雅夫  
（芥川也寸志委員は、1月31日逝去）

（50音順・敬称略）

以 上

## 林 康子氏

### 〔贈賞理由〕

わが国を代表するソプラノ歌手として、長年イタリアを中心として国際的にめざましい活躍をしてきた林康子は、昭和63年11月11日・新宿文化センター、同20日・香川県民ホール、同23日・神戸文化ホールで上演された藤原歌劇団の歌劇『蝶々夫人』でタイトル・ロールを歌い、抜群の歌唱力に支えられ、15歳のかわいい蝶々さんから3年後に名誉のために死を選ぶまでのこの作品の役柄を、身についたイタリア語の細やかなニュアンスとそれにとまなう演技や顔の表情が一体となった幅広い表現によってみごとに実現した。これは、彼女が海外での活躍で築きあげたひとつの完成されたステージとして高く評価出来るものである。

### 〔経歴〕

東京芸術大学で柴田睦陸氏、ニコラ・ルッチ氏に師事し、1969年同大学院オペラ科を修了。67年第36回音楽コンクール第3位、69年民音コンクールで第2位に入賞。同年イタリアに留学、ミラノのヴェルディ音楽院とスカラ座付属音楽学校に学んだ。70年モンティキアーリ国際コンクールとバルマ国際オペラ歌手コンクールで第1位、ヴェルディ国際声楽コンクールとヴィオッティ国際音楽コンクールで第2位、71年ロニーコ国際声楽コンクール第1位。72年イタリア国営放送ロッシーニ・コンクールで第1位に入賞した。デビューは1971年ピッコロ・スカラにおけるブリテン「ノアの洪水」でセムの妻を歌った。72年「蝶々夫人」でスカラ座に登場、その後同歌劇場をはじめコヴェント・ガーデン・ロイヤル・オペラ、バイエルン国立オペラ、ワシントンのケネディ・センター、シカゴ・リリック・オペラ、エクサン・プロヴァンス音楽祭など世界各地で活動している。日本では1969年二期会の「蝶々夫人」をはじめ、「ウエルグンデ（ラインの黄金）」、小沢征爾指揮の「コシ・ファン・トゥッテ」、藤原歌劇団の「アンナ・ボレーナ」、「蝶々夫人」などに出演している。1985年ミラノ・スカラ座におけるロリン・マーゼル指揮、浅利慶太演出による「蝶々夫人」は圧倒的な好評を博した。

